英文教材“The Big Turnip”の「形象」を読み解く発問の研究

An Analysis on Questions to Read “Imagery” in the English Text of “The Big Turnip”

山田昇司
YAMADA Syouzi
経営学科
syouzi@alice.asahi-u.ac.jp

要 旨

本論は英文教材“The Big Turnip”という物語の主題を読み解く発問を考察したものである。この発問を作成するためにまず最初に『大きなかぶ』の授業分析をしている大西（1988）を検討した。次に、英語教材“Crow Boy”における「構造読み」の意義と方法を論じている寺島美（1990）とこの英文教材“The Big Turnip”の「構造読み」「主題読み」について論じている寺島（1991）を参考にしながら、英文に即して「構造読み」「形象読み」「主題読み」の設問を考えていった。その結果、「形象読み」として注目すべき新たな語句があることや「主題読み」に直結する「題名読み」において新たな解釈を提示することが出来た。今後の課題としては、ここで行った教材分析に基づいた発問に学習者がどのように答えるかを実際の授業において検証することである。

キーワード：構造読み、形象読み、主題よみ、発問

1. はじめに

本論の目的は英文教材“The Big Turnip”という物語の主題を読み解く発問を考察・作成することである。大西忠治が文学作品の読み方として提唱した「構造読み」「形象読み」「主題読み」の技法をこの英文にも適用し、実際の授業で使える発問を作成することを目指す。

1－1 単純に見えるが「深い」意味を持つ話

この英文は有名なロシアの民話『大きなかぶ』が英訳されたもの（児童教育図書CHILDCRAFT）であるが、寺島（1985）において初めて教材として出版された。この英文は英語の基本語順SVOを学ぶ教材として最適であっただけではなく、内容的にも読むに値するものを含んでいた。

私は寺島（1985）を知る前まではこの物語は幼稚園の劇や小学校低学年の国語教科書で使われている単に「協同の大切さ」を教えるだけの子ども向けの話だと思っていた。ところが寺島（1985）に掲載されていた右遠（1987）の一文を読んでその考えは一変した。この短く単純なストーリーの中にこれほど深い意味が込められているとは！

そこで自分の授業でも寺島（1985，1991）や寺島美（1990）を手引きとしてこの教材を使い始めた。読みとりの設問については阿部隆子氏（当時岐阜市立中学校教諭）のプリントなども参考に作成し、そのとき勤務していた工業高校や普通科高校で実践した。私はこの教材で初めて「構造読み」を試みたの

だが、生徒が教師の想像を超えた読みとりをするのに驚いたものだった。（山田（2005：56－70））

１－２　大学生でも学びたくなる授業をどう作るか

その後わたしは大学で教えるようになりこの教材を使うことはなくなっていたが、基礎学力が定着していない学生の現状に接するうちに、もう一度この教材を使ってもよいのではないかと思い始めた。しかし、どのように教えたら大学生に受け入れられる授業となるのか。これまでと同じやりかたでは「幼稚」「易しすぎる」という印象を学生に与える可能性が高い。

そのようなことで頭を悩ませていたときに、寺島（1996）の映像を見たことを思い出した。そこでは参加者が場面ごとの絵を見て英文を諳んじて発表していた。それは一種の「英語を話す」疑似体験である。これなら大学生にとっても「やれそうな気がするが、やるには少し努力が必要」な課題になるのではないかと思った。（註１）

そしてもうひとつ考えたのが、この物語の主題に迫るような発問をさらに工夫して学生たちに自分の考えを日本語で書かせ、それを元にお互いの意見を交流させることであった。本論ではこの発問を作成するために、まず『大きなかぶ』の作品・授業分析をしている大西（1988）を検討する。そして次に「構造読み」の意義と方法を論じている寺島美（1990）とこの教材の「構造読み」「主題読み」について論じている寺島隆（1991）を参考にしながら、「構造読み」「形象読み」「主題読み」の設問を考えていく。

2.　大西による『大きなかぶ』の分析

本節では大西（1988）による『大きなかぶ』の作品分析を要約して紹介する。この記録は1970年に行われた授業検討会のものである。大西氏（当時、丸亀市西中学校）に加えて４名の小学校教師が参加している。

２－１　使われた文章の特定

この検討会の要約を書く前に、ここで用いられた日本語の文章を特定しておく必要がある。この記録には「教科書からとった」(ibid：195）としか書かれていないからだ。寺島（1991：89）は教科書に載った再話は３つあるとする資料を紹介しているが、大西（1988）には「かぶをぬこうとしました」(ibid：197)、「うんとこしょ、どっこいしょ」「まだまだ、まだまだぬけません」(ibid：202－203）という表現があることから、この教科書の文は内田（1962）から採ったものであることはほぼ間違いないと思われる。以下にその全文を掲載する。ただし、／は改行を、／／は改頁を示す。

おおきなかぶ　　内田莉莎子 再話、佐藤忠良 画

おじいさんが　かぶを　うえました。
「あまい　あまい　かぶになれ。／おおきな　おおきな　かぶになれ」／／
あまい　げんきのよい／とてつもなく　おおきい／かぶが　できました／／
おじいさんは／かぶを　ぬこうと　しました。
うんとこしょ　どっこいしょ／ところが　かぶは　ぬけません／／
おじいさんは　おばあさんを　よんできました。
おばあさんが　おじいさんを　ひっぱって、
おじいさんが　かぶを　ひっぱって――
うんとこしょ　どっこいしょ／それでも　かぶは　ぬけません。／／

おばあさんは　まごを　よんできました。／／
まごが　おばあさんを　ひっぱって、
おばあさんが　おじいさんを　ひっぱって、
おじいさんが　かぶを　ひっぱって――
うんとこしょ　どっこいしょ／まだ　まだ　かぶは　ぬけません。／／
まごは　いぬを　よんできました。／／
いぬが　まごを　ひっぱって、
まごが　おばあさんを　ひっぱって、
おばあさんが　おじいさんを　ひっぱって、
おじいさんが　かぶを　ひっぱって――
うんとこしょ　どっこいしょ／まだ　まだ　まだ　まだ　ぬけません。／／
いぬは　ねこを　よんできました。／／
ねこが　いぬを　ひっぱって、　いぬが　まごを　ひっぱって、
まごが　おばあさんを　ひっぱって、おばあさんが
おじいさんを　ひっぱって、おじいさんが
かぶを　ひっぱって――
うんとこしょ　どっこいしょ／それでも　かぶは　ぬけません。／／
ねこは　ねずみを　よんできました。／／
ねずみが　ねこを　ひぱって、ねこが
いぬを　ひっぱって、いぬが　まごを　ひっぱって、
まごが　おばあさんを　ひっぱって、おばあさんが
おじいさんを　ひっぱって、おじいさんが
かぶを　ひっぱって――
うんとこしょ／どっこいしょ／／
やっと、／かぶは　ぬけました。／／

以上の文章が須藤という小学校教師が「おおきなかぶ」の授業で用いたものである。検討会は彼の構造分析のプリント解説と授業の録音テープ視聴にしたがって進行する。その記録は９つの節に分けられ、それぞれ次のような小見出しが与えられている。次節ではその番号にしたがって順に要約していく。

(1)範読について　　(2)文章と挿絵の関係
(3)《二つ》の事件　　(4)《転化》－テーマとかかわって（a）
(5)コトバに対するセンス　　(6)動作化の意味
(7)テーマとかかわって（b）　　(8)「まご」から「いぬ」への飛躍
(9)テーマよみと発問

２－２　大西主宰の『おおきなかぶ』授業検討会で語られたこと

２－２－１　範読から構造の議論へ――第１節、第２節、第３節

まず最初に大西から「疑問点があったら即座に出す。はい範読」の指示がある。須藤の範読が何行も行かぬうちに、大西は「地の文と会話の文の読み分けが出来ていない」「リズムがある文章をこわして読んでいる」と指摘し、代わりに自分が範読する。「自分とあまり変わらない」と言う須藤を「リズムになっとんや、うたってないといかんのや」と大西は認めない。

次に文章と挿絵の関係が論じられる。須藤は自分の構造分析のプリントの説明を始めるが、プリントの「ひろびろとした大地」という用語について、大西は文章が絵本から取ったものか、教科書から取っ

たものかを須藤に確かめる。後者と答える須藤に対して、大西は「文章から発想すべきであった、絵からよけいなことをつけくわえる必要ない」と述べる。

その次の議論は須藤による文章の構造の説明に関して行われる。「かぶをぬこうとしました」を発端とみる須藤に対して賛意を示す意見あり。それに対して大西は「読解力のはなはだしい不足」と疑問を呈す。そしてこの物語には「まきました」と「ぬきました」の二つの事件があると捉える須藤の間違いを指摘する。「違うということが小説における事件だったら＜まきました＞＜かぶができました＞＜ぬこうとしました＞＜やっとぬけました＞と四つの事件になるではないか」と大西は説明する。

２－２－２　転化はどこか――第４節

須藤から出された「まごが犬を呼んできたところに転化が行われた」という考え方に対して、大西は「＜ここまでは人間で、あら、ここから犬に変わった＞と思う。そう思わせた瞬間、この作品を与えたことは不成功になる」と発言する。さらに大西は「おじいさんが引っぱり、まごまで引っぱったら、犬も引っぱらないといけない。犬だって家族の一員なんですよ」「本来区別があるのは、この身のまわり的な現実の社会にはあるんや。それらをこえて、犬もねこも人間もない、区別のつかないものとして、ある連帯感で結ばれている、それはなぜ？」と一挙にこの物語の核心へ切り込んでいく。

それを受けて、犬からねこ、ねずみというように、だんだん小さい力に移っていることの大切さが確認され、「やっとかぶはぬけました」に転化があることが確認される。大西はさらに、連帯感を作り出しているもの、むずかしい関係をこわしていくものは「かぶをぬく、という生産労働である」と先の問いに対する答えを提示し、さらにもっと重要なこととして「小さな力が加わるときにカーッと抜ける。この小さな力こそもっとも大きな力なんだ、大きな力も小さな力なしには、かぶは抜けないんだ」と述べている。

２－２－３　教師の言葉、動作化の意味――第５節、第６節

ここからは録音テープを聴きながらの授業分析に入ってゆく。一斉問答を聞いて大西は、教師のことばがきたない、子どもの発言と同じことを繰り返している、と指摘する。「そんなに大したことではないと思った」という発言に対して大西は、国語の教師は言語に対するセンスを大切にすべきと語る。

須藤はこの教材で単なる音読ではなく大きな声を出させる動作化を導入している。「かぶがなかなか抜けないで困っている気持ちをつかませる」とする須藤に対して、大西は「それによって何を読み取らせるのかという把握が甘い、子どもがどうしても読み取らなくて困り抜いて工夫しているのではない」と須藤の「技術主義」を批判する。大西はさらに「何を教えるかが、まずある。そこから工夫がくる」「技術を考えるときにはいつでも思想を考える」と述べている。

次に、須藤が「うんとこしょ、どっこいしょ」の場面で子どもの声が小さいと言ってやりなおしさせたことに対して大西はどんな助言が必要だったかのと問う。そして「声が大きくなったら＜なぜ大きくなったの＞と聞けばいいし、声が小さくなったらなったでそのわけをきけばいい」「かぶを引っぱる気持ちが変わっているところへ助言を追い込む」と述べている。また、動作化については教えようとすることが何かをしっかり掴めていなければ意味がないと断じている。

２－２－４　テーマにせまる発問とは――第６節、第７節、第８節

ここからは授業分析が中断され作品分析に戻る。大西は文章の書き方が、付け加わるものが先に来て強調され、最後には最も小さいねずみが強調されるようになっていることを指摘する。「新しい力がお

添えものではない。助力にもかかわらず、助力しているものをクローズアップしている。そのへんを発問できんかなあ」と問題提起している。

次の議論では、「ねこは何といってねずみを呼んできたか」という発問を巡ってこの作品のテーマに関わる問題が論じられている。大西は「かぶをわけてくれないんだったら、誰も手伝わないよ」「いつもおじいさんのかぶはみんなのものになるということを、すでにみんな知っているんだ」と述べ、さらにそのような共通の目的・利益があれば、ねことねずみも敵対関係を持たなくてもよいと指摘する。須藤が「ねことねずみはある種の敵対関係も持つ」と述べたことに対して、大西は本能的敵対関係を強調した観念論の立場であると指摘するが、須藤は納得しない。

ここから討議はいよいよ最終局面に入る。大西は教えなければならないことは、ひとつは「まごが犬を呼んでくるところの大きな飛躍をどう飛び越すか」だと主張する。(大西はまた「おばあさんが息子ではなくまごを呼んできたところ」にもかなり大きな飛躍があると言っている。) そしてもうひとつの教えるべきことは、おじいさんはかぶをみんなに分けてやるというイメージの中でみんなが手伝ってゆき、最後に小さな力を借りてかぶが抜けたところで一人ひとりの果たした役割のようなものが感覚的に分かって子どもがほっとすることであると述べている。

以上で大西 (1988：192－209) の要約を終わる。検討会全体の印象としては、大西が終始議論をリードし授業者の問題点については遠慮無く批判している一方で、(笑い)(みんな大笑い) に示されているように和気藹々とした雰囲気も伝わってくる。次節ではこの要約を3つの観点に分けて検討する。

3. 大西による分析の整理と考察

本節からは前節で行った大西 (1988：192－209) の要約を「構造読み」「形象読み」「主題読み」という3つの観点の順番に整理しなおして考察を加える。

3－1 「構造読み」に関する考察

最初に、文章における「構造」とは何かについて大西 (1988：11) から引用して確認する。大西は「文学作品のみではなく、ひとまとまりの文章は、かならず構造を持っている。構造をもっていないものは、ひとまとまりとはならないからである」と述べ、文学作品については「導入部」「展開部」「山場の部」「終結部」の4部構造になっているとした。それでは大西はこの作品の構造をどのように捉えているのであろうか。

3－1－1 大西の構造読み：「導入部」→「展開部／山場の部」→ϕ

大西 (1988：199) には以下のような記述がある。そこから判断すると、この検討会では「かぶを植えました」から「かぶを抜こうとしました」の手前までを「導入部」とし、さらに「展開部」と「山場の部」が重なっていると捉えていることが分かる。

国土：犬からねこ、ねずみというように、だんだん小さい力に移っているということはできる。

大西：そうそう。そのことの方が大事なんだな。だとしたら、転化がおこなわれたのはいったいどこ？

須藤：「やっと、かぶはぬけました」

海崎：そうすると、「おじいさんは、かぶをぬこうとしました」のところが発端だが、同時にクライマックスのはじまりでもあるんやな。

国土：そして、クライマックスが結末になっとる。

大西自身ではなく海崎という教師が「おじいさんは、かぶをぬこうとしました」が事件の発端でありクライマックスの始まりであると述べているのであるが、大西がそれを否定する発言をしていないことから、＜「導入部」→「展開部／山場の部」＞という「構造読み」を認めていると判断される。また「終結部」については特に言及されていないが、かぶがぬける場面を「クライマックス」として議論が行われていることから、「終結部なし」と考えていることは明白である。

3－1－2　寺島の構造読み：ϕ→「展開部」→「山場の部」→ϕ

ところが、寺島（1991：80－108）はこの話には「導入部」「終結部」のどちらもないと指摘している。寺島は自身が編集した寺島（1985）に採用したCHILDCRAFT版英文を検討する中で、第2段落の途中にDiscourse Marker（Then, one day）があることに疑問を感じて他の日本語再話テキストを調べてみると、他のテキストの中には明瞭な「導入部」や「終結部」のあるものが見つかったのである。

「導入部」あり・・・若林（1983）

「終結部」あり・・・若林（1983）、香山（1987）、Ullstein（1950）

寺島（1991）に引用されている以下の若林（1983）の冒頭の2文は明らかに作品の背景が書かれている説明になっており、その後の「あるとき、おじいさんはかぶのなえをうえました。」からは具体的な動作の描写が始まっている。

あるむらに、たいへんはたらきもののおじいさんがすんでいました。

おじいさんは、あさからばんまで、せっせとはたけをたがやして、おひゃくしょうのしごとにせいをだしていました。　←ここまでが物語の背景説明

あるとき、おじいさんはかぶのなえをうえました。←ここから物語の描写が始まる。

そして、くさをとったりみずをやったり、いっしょうけんめいにそだてました。（以下略）

また、若林（1983）、香山（1987）、Ullstein（1950）の作品には、クライマックスであるかぶが抜けた場面の後の話も書き足されている。ここでは寺島（1991）より香山（1987）の例のみを引用して「終結部」とはどのようなものかを確認する。

よるになった。

おおきなおおきなかぶで、おばあさんはおいしいスープをつくった。

とてもおいしいスープだった。

これらの作品と比較検討することによって寺島（1991）は、大西の検討した内田（1962）と寺島（1985）で採用したCHILDCRAFT版英文には「導入部」と「終結部」がないと判断したのである。

内田（1962）

おじいさんが　かぶを　うえました。

「あまい　あまい　かぶになれ。／おおきな　おおきな　かぶになれ」

あまい　げんきのよい　とてつもなく　おおきい　かぶが　できました。

おじいさんは／かぶを　ぬこうと　しました。

・・・・

やっと、／かぶは　ぬけました。

CHILDCRAFT版英文：寺島（1985）

Once upon a time an old man planted a little turnip and said,

"Grow, grow, little turnip, grow sweet!　Grow, grow, little turnip, grow strong!"

And the turnip grew up sweet and strong and big and enormous.

Then, one day, the old man went to pull it up.

・・・・

They pulled and pulled again, and up came the turnip at last.

このCHILDCRAFT版英文は、寺島（1991）においてアレクセイ・トルストイがこの話を再話する過程において取った方法にしたがって改定されている。具体的には「よけいな語句を取りのぞ」いて「きびしく練り上げられた」(金光(1989:70))の文体にするために、副詞句のOnce upon a timeとThen, one dayを削除した。その結果その改定テキストは内田（1962）とほぼ同一の文章構成になった。

改訂版英文：寺島（1991）　　註2

An old man planted a little turnip and said,

“Grow, grow, little turnip, grow sweet！　Grow, grow, little turnip, grow strong！”

And the turnip grew up sweet and strong and big and enormous.

The old man went to pull it up.

・・・・

They pulled and pulled again, and up came the turnip at last.

したがって、下記に示す文章の構造はそのまま内田（1962）にも当てはめることができ、大西の分析を英文テキストの構造解析に援用することも可能になるのである。

「導入部」　なし。

「展開部」　“An old man planted a little turnip”から

「山場の部」“The old man went to pull it up.”から

「終結部」　なし。

しかし、ではどうして大西はこの内田（1962）において3－1－1節で述べたように<「導入部」→「展開部／山場の部」→ϕ>の構造をもつと考えたのであろうか。次節ではその理由について考える。

3－1－3　大西はなぜ「導入部あり」と考えたのか

大西（1988：27－33）は『暗夜行路』序章の中のひとつのエピソードの「構造読み」に関して、発端を決めるのは「事件のはじまり」という概念だけではなくて説明から描写へ筆づかいが変わることもそれを決めることが多いと述べている。

内田（1962）においては、冒頭の文「おじいさんはかぶを植えました」から最後の文まで全てが出来事を<描写>している文であることは明白なので、大西が「導入部なし」と判断することは容易であっただろう。

しかし大西がその判断をはっきりと示していないのは、私の推測では「おじいさんがかぶをぬこうとしました」が山場の部のはじまりであることを押えさえすればこの物語の主題が読めると考えていて、他の部分の構造がどうであるかについてはあまり関心を払わなかったのではないか、と思われる。というのは、そもそも構造を読むのは主題を読むために行うものであるので主題が明確になったときには全ての構造を確定する必要はないとも言えるからである。

さてここまでは、大西（1988）と寺島（1991）がこの作品で行った「構造読み」について比較検討してきたが、次節からは、「形象」を読む際にどの部分を読むのか、またそれをどのように「ふくらませて読む」のかについて考察する。

3－2　「形象読み」から「主題読み」へ

英文に即して考えていく前に、まず「形象読み」「主題読み」とはどんなものであるかを大西（1988：148）から引用して確認したい。大西は「形象読みとは、そのことば、その文が内包しているものの、可能な限りを、ふくらませて読みとっていくことである」と述べ、小学校の低学年の生徒には「うら読み」「広げ読み」と教えることもあると述べている。

この「形象読み」で＜何を＞読むかについてを４つの構造に即してまとめると次のようになる。（大西（1988：82－83））

導入部の「形象読み」は、「時」「場」「人物」「事件設定」を読む

展開部の「形象読み」は、「事件」「人物」「文体」を読む

山場の「形象読み」(＝「主題読み」)は、「事件」「人物」「文体」を読む

終結部の「形象読み」(＝「主題読み」)は、「事件」「人物」「文体」を読む

題名の「形象読み」(＝主題読み)

山場・終結部・題名の「形象読み」が「主題読み」となる理由については大西（1988：132－133）は次のように述べている。（筆者による要約）

主題は作品全体を貫き流れているある傾向、ある法則、ある統一したものであるので作品全体から導き出されるものである。しかし実際には作品の部分部分が同じ程度に主題を語っているわけではない。作品の始めの部分よりも終わりの部分へと移り流れて行くにしたがって主題はより濃密に語られている。だから山場の部の形象読みはただ形象読みに留まることは出来ないし、そうあってはならない。

以上のことから、「形象読み」とひとくちに言っても様々なレベルの「形象読み」があるが、その中でも山場の部、終結部、題名の「形象読み」が主題を読み解くのに直結していることが分かる。次節ではそのことを踏まえて、寺島（1991）に提示された改訂英文に沿って「形象読み」を行っていく。

3－2－1　どこをどのように「形象読み」したらよいか

本節ではまず最初に「形象読み」の対象となる改訂版英文の全文を掲げる。文頭の番号は段落番号を示し「形象読み」の問いを設定した英文には下線を施してある。

1　An old man planted a little turnip and said,
　"Grow, grow, little turnip, grow sweet！　Grow, grow, little turnip, grow strong！" ＜問１＞
2　And the turnip grew up sweet and strong and big and enormous.　＜問２＞
3　The old man went to pull it up.
　He pulled and pulled again, but he could not pull it up.
4　He called the old woman.
5　The old woman pulled the old man,
　The old man pulled the turnip.
　They pulled and pulled again, but they could not pull it up.
6　The old woman called the granddaughter.　＜問３＞
7　The granddaughter pulled the old woman,
　The old woman pulled the old man,
　The old man pulled the turnip.
　They pulled and pulled again, but they could not pull it up.
8　The granddaughter called the black dog.　＜問４＞

9 The black dog pulled the granddaughter,
The granddaughter pulled the old woman,
The old woman pulled the old man,
The old man pulled the turnip.
They pulled and pulled again, but they could not pull it up.
10 The black dog called the cat.
11 The cat pulled the dog,
The dog pulled the granddaughter,
The granddaughter pulled the old woman,
The old woman pulled the old man,
The old man pulled the turnip.
They pulled and pulled again, but still they could not pull it up.
12 The cat called the mouse. ＜問５＞
13 The mouse pulled the cat,
The cat pulled the dog,
The dog pulled the granddaughter,
The granddaughter pulled the old woman,
The old woman pulled the old man,
The old man pulled the turnip.
They pulled and pulled again, and up came the turnip at last. ＜問６＞

３－２－１－１　展開部における「形象読み」――第１連、第２連

まず展開部で注目すべきところは、ここでは以下に示すような反復と対比が巧みに織り込まれて物語が語り始められていることである。そこで、それぞれの対比や反復に込められている作者の意図を問う設問をここで考えたい。

＜対比＞

an old man　老人　⟷　子ども（のようなもの）a little turnip
little turnip　小さな　⟷　大きな　big、強い　strong
big　大きな　⟷　とてつもなく大きな　enormous
sweet　甘い　⟷　強い　strong

＜反復＞

Grow, grow, little turnip, grow strong !
Grow, grow, little turnip, grow sweet !

＜問１＞の下線部英文では「growの繰り返しにはかぶに対するおじいさんのどんな気持ちが込められているだろうか」と問う。この英文はこの物語の中で唯一の会話文であることからおじいさんの人物形象が想像しやすい。growの反復やan old man／a little turnipの対比から、おじいさんが自分の子ども（あるいは孫）を慈しみ育てるような愛情をこの小さなかぶに注いでいることに気づくだろう。

次に＜問２＞の英文では前文にはない形容詞bigとenormousに着目する。この英文では単に「大きくbig」なったのではなく「とてつもなく大きくenormous」と述べており、これもひとつの対比と言えるだろう。筆者はこの対比がこの物語の非現実性、すなわち寓話性を暗示した最初の言葉ではないかと考える。

そこで、ここでは「この文ではgrew upの後にsweet and strongだけでなくand big and enormous

という形容詞も出てきます。big（大きく）の後にさらにenormous（巨大に）と言葉を言い添えていることからあなたはどんなことを想像しますか」と問う。読み手はこれから始まるであろう収穫作業の困難さを予測したり、enormousという言葉が含意する「驚き」「意外性」からこの物語の寓話的非現実性に気づくことになるだろう。

３－２－１－２　山場の部における「形象読み」――第３連～最終連

さてここからは山場の部の「形象読み」に入る。主題読みに直結するところである。ここでの問いは登場人物の意外性について考えさせるものが中心になる。

まず最初の設問＜問３＞では「おじいさんがおばあさんを呼ぶのは分かるが、おばあさんはどうして力のあまり強いとは思えない孫娘を呼んだのだろうか」(註３）と発問する。この問いに対しては「かぶがとてつもなく大きくて抜けなくて困っているのだから、自分だったら力のある人を助力として呼ぶと思うが、回りにはそういう人がいなかったのだろうか」という疑問が出されたり、あるいは家族のメンバーを想像しておじいさんやおばあさんの息子夫婦の不在に気づく読み手が出てくるかもしれない。この設問は助力のために呼ばれる登場人物が次々に前より力の弱いものになっていくことに最初に気づかせる問いともなっている。

次の設問＜問４＞では「孫娘が助力を求めていぬを呼んだことからどんなことが分かるか」と問う。回答例としては「孫はいぬといつも仲良く遊んでいた」という素朴な反応や「どうして人間ではなくて動物なのか」という疑問を感じるものも出てくるであろう。

前者の反応はこの後に続く「いぬ→ねこ」「ねこ→ネズミ」という関係にも繋がってくるものである。なぜなら、これらの動物はふつうは仲がよくないと思われているからである。また後者については、この部分がこの物語の非現実性を決定的にするところであることから当然の疑問であろう。

次の＜問５＞では「いぬはねこに、ねこはネズミに助力を頼むのであるが、どんなふうに声を掛けて助けに来てくれと頼んだのだろうか」と問う。この問いは本来仲が悪い、大西（1988：206）の言葉を借りれば「敵対関係」にあるもの同士がどうして協働できるのかについて考えさせるものである。収穫された巨大なかぶが公平に分配されるという共通の意識があることに気づかせたい。「かぶを抜くのを手伝えば、またいつものように分け前がもらえるよ」「今度のかぶはとてつもなく大きいから分け前もたくさんあるよ」といった回答が予測される。

設問＜問６＞の英文はなかなか抜けなかったかぶが小さなねずみの力が加わってついに抜けたところでこの物語のクライマックスに当たる。文体の大きな変化が事件の大きな転換を示していることに気づかせるために「この物語の英文はほとんど主語＋動詞$\underline{S}(\overline{V})$の形で書かれているが、この部分だけは$(\overline{V})\underline{S}$と倒置されている。どうしてだろうか」と発問する。

ここまでの二つの節では、展開部、山場の部における英文に沿った発問を考えてきたが、次節では英文全体についての発問について考察する。

３－２－２　文章全体に関する発問

文章全体あるいは文章相互の関係に関する発問としては次の＜問７＞から＜問９＞までのようなものが考えられる。

最初の設問＜問７＞は、この物語に次々と現れる登場人物が助力を頼まれて誰も断らないことについて尋ねるものである。

「大きなかぶの収穫に次々と新たな助っ人が呼ばれるが、誰一人としてその援助の申し出を断ること

はない。このことはどんなことを意味しているのだろうか」

上記のように問い返されてはじめて読み手は、この物語においては本来は仲が良くないもの同士が自然に当然のごとく協働していることの不思議さに気づくだろう。＜問５＞とも関連させ、おじいさんはかぶを独り占めしない、すなわち収穫されたかぶはみんなのものであるという意識が登場人物の間にあること、もしもそれまでに手伝ってもその分け前をもらえないことがあったならば、援助の申し出を拒否するものも出て来ただろう―といった反応を想定している。

次の＜問８＞の設問は登場人物が出てくる順番について思考させる問いである。登場人物を反対にした場合と比較することでこの物語の明確な主題が浮かび上がってくる。

「この物語ではおじいさんからネズミまでの３人と３匹の力を合わせることによって大きなかぶを収穫することが出来るのだが、おじいさんの助っ人として次々と登場してくる人物の力はだんだん弱くなり、最後にもっとも小さくて力の弱いネズミが登場してかぶがついに抜けている。このことはどんなことを意味しているのだろうか。登場人物の順番が逆の場合と比較して考えてみなさい」

この問いに対して、西郷（1973：31）は「最後におじいさんが登場してかぶが抜けるのであれば、やはり力の強いものがいなければ物事は解決しないという結論になってしまう。そうではなく、ひとつの協同作業の中ではネズミとおじいさんが等価であること、ちっぽけな力でも人間社会においては欠かせない存在であることをこの物語は訴えているのでなかろうか」という回答を与えている。六者の力の総和でかぶが抜けるのであっても、その順番が反対であれば、ありきたりの常識的な結論が導かれるだけである。この順番こそが「おおきなかぶ」の大きな魅力を生み出している源泉となっている。

最後の設問＜問９＞はこの物語に登場しないものを想像させる発問である。問われなければまず気づくことはない隠された構図に読み手を誘うものである。このことを指摘した右遠（1987：9, 12）の読みの鋭さには脱帽せざるをえない。

この物語には、家族の中のお父さんやお母さんは出て来ずに、農作業の中心的な担い手ではないおじいさん、おばあさん、孫娘が登場する。また３匹の動物についても、それは農作業に役立たない犬、猫、ねずみであって、畜力として貢献する牛や馬は出てこない。この３人と３匹の組合せにはどんな意味が込められているのだろうか。

この問いは＜問３＞とも繋がってくるものであるが、当時の農民の生活の様子まで想起する必要があるだろう。右遠は「作者はこの３人と３匹を＜力の弱い者のグループ＞の象徴として選んだのであろう。そしてこの弱者グループはおそらくは穀物の収穫に出かけて行っているであろうお父さんたちの強い労働力と対比されて、労働力としてはどちらも等価であることが暗示されていると考えられる」と述べている。

以上で主題読みに誘う「形象読み」の発問の考察を終えるが、次節ではこれらの発問を考えるうちに気づいた物語の「簡潔さ」「単純さ」について述べる。

３－２－３　「簡潔さ」「単純さ」から読み取れるもの

この作品の形象を分析するうちに私はこの物語で使われている形容詞や副詞（句）の数が少ないことに気づいた。以下に示すように形容詞が７個、副詞（句）が４個しかない。

形容詞：old, little, sweet, strong, big, enormous, black

副詞（句）：not, still, up, at last

このことは作品全体を修飾性を削ぎ落とした簡潔な文体にしているのだが、それだけにこれらの形容詞や副詞句の箇所ではそこに込められた形象をしっかりと「読む」ことが必要になってくる。形容詞old,

little, sweet, big, enormousについては3－2－1－1節においてその対比が含意するものについて述べたが、副詞についても次のような形象読みができる。

まずstillについては次のように考える。英文They pulled and pulled again, but they could not pull it up. が合計3回反復されているが、その意味は同一ではない。なぜなら、登場人物はだんだん増えていくのでtheyの意味は異なるしその文が表現している「抜く力」はだんだん大きくなっていっているからである。しかし、ねこが加わった時の力はこれまでと全く同じ文（形式）では表現しきれないほどの大きさになって別の形式stillを要求する。そしてそれは次に来るクライマックスを予告する言葉でもある。また、upやat lastという副詞は緊張感が最高に高まって事件が破局から解決に転化する瞬間に現れていると言うことができるだろう。

一方で、修飾語句がなく単純な反復や文の拡張から構成されているその他の大部分では語と語、文と文の関係から形象を読み取っていく。単純な文がだんだん伸びてゆく「文と文との関係」について寺島（1991：93－94, 96－98）は「繰り返しが文のリズムを作るだけでなく、かぶを引き抜こうとする人物の連鎖の伸びが団結の力強さを前面に押し出す」と解析している。

「おばあさんがおじいさんを、おじいさんはかぶを引っぱって」

繰り返し（上線）→リズム　　延びてゆく連鎖→力強さ

「まごむすめはおばあさんを、おばあさんはおじいさんを、おじいさんはかぶを引っぱって」

繰り返し（波下線）→リズム

「いぬはまごむすめを、まごむすめはおばあさんを、おばあさんはおじいさんを、おじいさんはかぶを引っぱって」

また右遠（1987：9,12）は、簡素で単純な構造を持つこの文章の行間から下表に示すような見えない登場人物と「隠された対比」を明らかにしている。

	＜力の強いもの＞ ← 対比 →	＜力の弱いもの＞
目に見える対比	おじいさん	ネズミ
隠された対比	息子夫婦 ＝中心的な農作業の担い手 牛・馬 ＝農作業に貢献する畜力	おじいさん、おばあさん、孫娘 ＝引退したor未熟な労働力 犬、猫、ネズミ ＝農作業には役立たない動物

この隠された登場人物と対比の発見は前節の＜問9＞で紹介したものであるが、この作品の奥深い面白さを示すものと言えるだろう。さて次節ではいよいよこの作品のタイトルである「大きなかぶ」に込められた形象を考察する。

3－2－3　題名「大きなかぶ」をどう読むか

本節では形象読みのクライマックスとも言うべき題名の形象読み（主題読み）を試みる。前節の最後に掲げた表は右遠（1987：12）の「主題読み」の記述をそのまま写したものであるが、私は「穀物の収穫に出かけていったであろうお父さんたち強い労働力」という記述をヒントにしてさらに「穀物vsかぶ」という対比もそこに加えてみた。

このような対比を考えた理由は「かぶ」は「お金にならない」自給用作物であるが故に「力が弱いもの」の象徴であると捉えられるからである。日本の農家でも自分の家で食べられない分の米は農協に出して家計収入の一助とし、自宅の前や近くで育てる野菜は自分の家で食べることが多い。「金力」＝「権

力」という関係である。だから、3人と3匹が収穫するものは「小麦」ではなくて「かぶ」でなくてはならなかったのだ。

穀物：お金になる商品としての穀物（小麦など）

かぶ：お金にならない自給用として栽培される野菜としてのかぶ

それではなぜ「大きなかぶ」なのか。私はそれは公平に分配されない「大きな富」を暗示しているのではないかと考える。そしてそれはまた同時に、弱者が力を合わせて立ち向かう「大きな力」、すなわち、富の公平な配分を認めない「大きな権力構造」を意味しているとも読み取れる。さらに言うと、物語に出て来た形容詞enormousはその権力構造がただ「大きい」のではなく「巨大」であることも暗示しているのかもしれない。

以上のことを念頭において、この物語の描く社会と現代の日本社会の現状を並べてみるとそこには下表に示すような対比がくっきりと浮かび上がってくる。

物語の描く社会	日本社会の現状
かぶを公平に分配するおじいさん	低賃金で働かせ利益を分配しない企業
公平に分配される大きなかぶ	大企業に溜め込まれる巨大な内部留保
弱きものが連帯する収穫作業	労働者がばらばらにされたままの職場
敵対関係を乗り越えさせる生産労働	敵対関係をもたらす正社員と非正規社員の働かされ方
強者と弱者が共存共栄する社会	「勝ち組」と「負け組」が分裂する格差社会

この中の「正社員と非正規社員の敵対関係」については、以下に示す堤・湯浅（2009：145－146）がその関係を説明している。

堤　派遣村への世論の反応が見事にそれを表していましたね。賛否両論出てくる中で、いま湯浅さんが言った、労働環境がどんどん悪化している正社員の反応にとても冷たいものが多かったのが印象的でした。まあ一言で言うと、「甘ったれるな、俺たちだってこんなに大変なのに必死で頑張ってるんだ」ですね。「非正規よりはマシだろう」と言われてガマンしてきた、正社員側の悲鳴に聞こえました。その時ふと思ったんです。それぞれに言い分はあるだろう。でも、苦しい者がもっと苦しいものを叩く構造を誰よりも喜んでいるのは誰だろう？と。

このあと堤は、アメリカにおいて貧困層の高校生を騙して入隊させる軍隊のリクルーターたちの実態が明らかになって批判された件について、彼らも実は毎月の新兵ノルマをこなさなければ即前線に送られることに怯えていたという事実を紹介し、「戦うべきは自分を搾取するシステムそのもの」であると述べている。

作品のタイトルは作品の中でいちばん短い部分であるがゆえに、読み手がいちばん自由に、広く、深く、読みを広げられる部分であるので、読み手のそのときの気持ちや現状認識が反映されてくると思う。次節ではこの読みに対して出された反論を紹介する。

3－3　題名読みへの異論

前節で述べた題名読みに対してJAASET（註4）主催の春の研究会（2010. 3.22）において論理の飛躍があるのではないかと指摘する意見が出された。その意見は「大きなかぶ」という題名から以下の(2)の意味まで読み取るのは無理があるというものであった。

(1)　公平に分配されない「大きな富」

(2)　弱者が力を合わせて立ち向かうべき「大きな力」

＝富の公平な配分を認めない「大きな権力構造」

この意見に対して筆者はこの解釈は以下に示す大西（1988：205－206）の発言を踏まえて考えたものであると反論した。

大西：ぼくだったら「一回だましたら、次は手伝うだろうか」って聞くね。そしたら「手伝わん」。そのとき「それやのに、みんな手伝ったのはどうしてだろうか」と、もう一度ききかえす。

海崎：だまされた経験がないからやな。

大西：ということは、いつもおじいさんのかぶはみんなのものになるということを知っているんだな。つまり労働で得た生産物は、おじいさんがひとりの勝手にしないんだ。ところで、子どもに「じゃ、みんな手伝うか」というと、「手伝わないよ」っていうね。だって実際は自分のものになるかどうか分からないもの。「手伝ったくらいでは、くれないよ」って子どもが言う場合だってありうる。

海崎：その方が多いね。

大西：そんなのが出て来たら「ウーン、困ったね。ここではおじいさんも犬も、そんなこと思ってないんだね。どうしてだろう、困ったね」――それでいいじゃないの。それから先は体制批判になるからね。

つまり大西は子どもが自分の日常的な生活実感から直感的に「労働で得た生産物を独り占めにする」何かがあることを知っていると考えているのである。ただその具体的な正体（＝体制）については小学生にそれを述べるのを保留している。

一方、本文で紹介した右遠（1984）には次のような見解が述べられている。

たしかに、「おおきなかぶ」には労働と団結の用が説かれているが、これは、人間の営為にとって基本的かつ普遍的な用件として提出されているのであって、社会体制や、体制を支えるイデオロギーを超えたものになっているのだ。（中略）

もともと民話というものは、どこの国のものでも、長い時間をかけ、民衆の生活のなかで検証され、取捨加減を経て単純化され、典型化されたものである。そこに民衆の苦難な現実を反映して、ある種の願望を含めた非現実的な要素と、同時に、きわめて現世的な人生訓の混在があるとしても、自然のかおりと労働のいぶきをどこかにひそめているものだ。そこにイデオロギーはない。（後略）

右遠は「民話」というものの生成過程を踏まえて、そこから「社会体制」や「体制を支えるイデオロギー」までも読み取ることは「解釈の偏向」であると述べており、大西の見解とは異なっている。

しかし筆者は大西の見解を支持する。なぜなら右遠（1984）が言及する「民衆の生活」「民衆の苦難な現実」というものはその時の社会の仕組みとそれを支えているイデオロギーとは無関係ではあり得ないと考えるからである。実際に私はこの物語の形象を読み解きながら自分の頭の中に3－2－3節の表で示したような対比の構図が浮かび上がってきたのである。ただ文学作品の解釈が読み手によって異なることは当然のことであるので、授業においては、多様な意見が出されてお互いに学び合えることが望ましいと考えている。

4.　まとめ――「形象読み」と授業構築

ここまで本論で検討してきた「形象読み」の問いは英文テキスト全文とともに授業プリントに掲載されることになるが、その問いに先だって「クライマックスはどこか→その理由は？」「そのクライマックスの始まりはどこか→そう考える理由は？」という「構造読み」を行うことが必要である。寺島隆（2006）は「構造読み」をせずにいきなり「形象読み」の線引きを行った実践に対して以下のように「構造読み」の重要性を語っている。

「構造」をめぐって議論するうちに「形象」を読まざるを得なくなり、「山場」や「クライマックス」の確定をめぐって議論するうちに半ば「主題」の議論に自然に踏み込んでいるからこそ、「構造読み」の意義があるのです。

実際の授業においては、まず「構造読み」における意見の相違を引き出してから「形象読み」の発問を考えていくことになる。現状では小グループによる意見交換が難しいので教師が紙に書かれた学習者の意見を元に＜討論の柱＞を立てるのが現実的な進め方となるであろう。

最後に形象を読むことの面白さについて述べたい。この作品の「形象」を解析することは一種の謎解きのような作業であった。「反復」「対比」という形象には作者の何らかの意図が隠されていたし、「形式の変化」という形象は「意味の変化」が要求したものであることも分かった。また、物語が語る主題（理想）は現代の日本社会にある矛盾との「対比」においてくっきりと私の目に映し出されてきた。さらには「題名」の形象読みでは寺島美（1991：102－104）の*Crow Boy*や大西（1986：104－107）の『走れ、メロス』を読んだときに感じたような知的興奮を追体験することができた。本論で作成した発問がそのような面白さを学生たちと共有するのに役立つことを願う。

NOTES

1. 「やれそうな気がするがやるには少し努力が必要な課題」というのは、寺島（2007：57－61）の以下に示した「私の教育原理」4.0教材論から学んだものである。（特に下線部分）

4.0　教材論　　「英語を」教えるのか、「英語で」教えるのか

4.1　教材の選択

0　ヴィゴツキー最近接領域の理論（やればできる最も困難な課題を与える）

1　「感動」を呼ぶ教材…「驚き」と「発見」のある教材

2　「生活現実」と切り結び、生徒に考えさせる教材

3　「英語を」と「英語で」の統一…ひとつのテーマで統一された教材

4.2　教材の使用・自主編成

0　クラッシェン…「iプラス１」の教材

1　「易しい教材を深く」「難しい教材を易しく」教える

2　「内容のある難しい教材」を「易しく」教えるための自主編成

3　コンテント・スキーマーを与える…ヒント、カット、資料の重要性

2. 寺島（1991：81）に掲載されているCHILDCRAFT版英文の段落番号【２】の位置は誤植である。また、改訂版テキストとして掲げてある第２・３段落の英文がp.94とp.100では異なっているが、本論では後者の方が正しいものとして論を進めている。

3. 大西（1988：83－84）はその語や文だけを読む「一次形象読み」と、語と語（文と文）の相互関係を読む「二次形象読み」があると述べているが、実際にはひとつの語や文であっても前後の文脈の中に位置づけられているのであるから、そこだけの形象を読むとはなかなか言い切れない。例えば、今回作成した＜問３＞にしても、下線を引いた部分を問う設問を推敲するうちに自然に他の文にも言及せざるをえないものになっていった。

The old woman called the granddaughter.

最初に作った＜問３＞ おばあさんはどうして孫娘を呼んだのだろうか。

推敲後の＜問３＞ おじいさんがおばあさんを呼ぶのは分かるが、おばあさんはどうして力のあまり強くない孫娘を呼んだのだろうか。

寺島（2006）は「私には「２次形象・３次形象」という読みも、大西さんの『文学作品の読み方指導』を読んだ限りではよく理解できませんでした。私が「大西さんは仕事を未完成のまま他界された」というのは、このような意味を込めて言っているつもりです」と述べているが、上述したような理由もあるのだろうか。

4.　JAASETは寺島隆吉氏が主催する研究会で1986年に創設された。通称「英語記号づけ研究会」。正式名称は「英語教育応用記号論研究会Japan Association of Applied Semiotics for English Teaching」である。

REFERENCES

内田莉莎子（再話）(1962)『おおきなかぶ』福音館書店
石遠俊郎（1984)『子どもの目、大人の目』青木書店
大西忠治（1986)『国語おもしろ勉強法』民衆社
大西忠治（1988)『文学作品の読み方指導』明治図書
金光せつ（訳）(1989)『大きなかぶ』偕成社
西郷竹彦（1973)『文学の読み方・教え方』部落問題研究所
堤未果、湯浅誠（2009)『正社員が没落する―「貧困スパイラル」を止めろ―』角川書店
寺島隆吉（編）(1985)『The Big Turnip』三友社出版
寺島隆吉（1991)『英語記号づけ入門』三友社出版
寺島隆吉（1996）映像『放送大学講座（英語）The Big Turnip』JAASET教材ネットワーク
寺島隆吉（2006)「英語にとって「読み」とは何か（上）―「構造読み」「形象読み」「主題読み」をめぐって」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』Vol. 55 no. 1 p. 105－135
寺島隆吉（2007)『英語教育原論』明石書店
寺島美紀子（1990)『英語授業への挑戦』三友社出版
山田昇司、寺島隆吉（監修）(2005)『授業は発見だ』あすなろ社